

29 「10年後になくなる仕事」はどうなった？

「ジャケ買い」なるもの、ご存じですか？レコードやCDなど、中身を知らないままジャケット（パッケージデザイン）の良し悪しで購入することをそう言います。さすがに本のジャケ買いは厳しいですが、「タイトル買い」ならありかもです。「家では女房を上司と思え」（川北義則著）というタイトルを見かけた時、さすがに手に取りませんでした。家の本棚には吉行淳之介の「春夏秋冬女は怖い～なんにもわるいことしないのに」ならあります。あっ、今女性読者の半分を敵に回した気がします。すみません、深い意味はありません。でも、うなずいた男性読者も5人くらいはいたかもです。もちろん冗談です。

さて、大学図書館のお薦めコーナーで「10年後に食える仕事 食えない仕事」（渡邊正裕著）という本を見かけました。タイトルが気になり早速中身を見ましたが、はじめの一文は「各世代、すべての働き手が対応を迫られている」で、テクノロジーの進化と労働市場変化を論じた本です。この手の話題の始まりがいつかは覚えていませんが、大きく話題になったのは、2015年12月に野村総研とオックスフォード大学が共同研究で、「AIの導入によって日本の労働人口の49%の仕事が10～20年以内になくなる」というレポートを発表した時からではなかったでしょうか。あれから10年弱、この予想が、政府の「年金行政」の目論見がはずれたのと同様に（これまた例えが悪かったですか？）はずれるのか当たるのかはまだ分かりませんが、若い人の不安をあおり立てるのはいかがなものかと思わなくはないです。どんな職業も会社も時代の流れで、なくなったり変化するのは当たり前。むやみにAIやロボット化を失業リスクにつなげるのは、かつて不安を煽った「ノストラダムスの大予言」とおんなじかも知れないと思わなくもないです。

話題を変えて、映画館入場者数のピークは1958年の11億2700万人。その後、テレビの普及により1972年には2億人を切り、さらに、ビデオの普及などで2022年には1億5200万人。このようにテレビの出現で映画入場者数は激減しましたが、今でも良質な映画は生まれ続け、映画業界が息絶えたわけではないことはご承知の通り。どちらかと言えば、山口瞳が1965年のエッセイの中で「時計のいらなくなる時代がくるような予感もする。テレビが柱時計を代用している。朝は最も正しい正確な時刻を一分毎にテレビが教えてくれる」と、テレビの普及がもたらす時計への影響を予言していたことの方が面白いです。スマホを時計代わりにしている昨今の状況も見れば、まさに「大予言」だったと言えるのでないでしょうか。ともかくAIの進化でこの仕事なくなる・なくならないって、何か短絡的な感じがしませんか。少なくとも、親や教育者はもっと本質的な部分で、子どもたちへのキャリア教育を考えた方がいい気がします。

山口瞳の言葉をもう一つ。「新入社員諸君！酒の話だが、僕は、あの『一気飲み』というものを好まない。特にウイスキーは、ゆっくり味わって飲むものだと思っている。仕事だってそうじゃないか。そりゃ、素早く正確に越したことはない。だけど、僕のような者でもやれたんだ。僕は、いま、諸君に『ゆっくり、ゆっくり、正確に』と言ってやりたい気持ちになっている」さて、若い人に仕事を任せて、「素早く正確に」にやられた日には、私なんかは「コンピュータじゃあるまいし、可愛げがないな」と心の中でチツと舌打ちしちゃいそうです。もちろん、これも本気半分冗談半分で言ってますので、ご了承下さい。

令和6年8月1日 大村城南高等学校長 中小路尚也